

事業は人なり

昨年、輪島病院で新生児が亡くなる医療事故が起きました。市は病院側の過失を認め全面的に謝罪したことが報道されました。

事故が発生し、公表に至るまでの間、事故調査委員会による徹底的な調査が行われました。そのすべてを把握しているわけではありませんが、ある判断が新生児死亡に繋がったということは間違いないようです。隣の輪島市で起こったこの事故は、これから出産を迎える世代やそのご家族に対し大きな不安を与えたでしょう。同じく公立病院を持ち、周産期医療が課題でもある穴水町にとっても、大きなできごとでした。

事故の背景にあるのは産科医の不足です。穴水町も、医師の高齢化と助産師確保困難の理由から、平成29年7月から産科外来を休診しており、以来、分娩は行われていません。

奥能登では輪島病院だけが分娩が行える病院でした。産科医の不足は奥能登だけの問題ではなく、全国的に顕在化している問題です。ではなぜ、産婦人科の医者が足りないのか。その理由として、当直や深夜の緊急呼び出しが多い過酷な労働環境とそれに見合わない低い対価に加えて、他科に比べて医療訴訟が多く敬遠されていることが指摘されています。

この事故を受けて石川県は、県内の実情を把握すべく実態調査に乗り出しました。馳知事も選挙公約の中で能登での周産期医療センターの整備を掲げているので、皮肉なことですがこの動きは加速するでしょう。

今、この文章を書いているときにふと思い出したことがあります。それは、忠縄輝雄先生のことです。忠縄先生はかつて町内で産婦人科の開業医としてご活躍をされ、町に多大な貢献をされた方です。私も仕事の関係で、先生の晩年に大変お世話になりました。宴席で先生と話しているとき、昔は1日に何人もの出産に立ち会ったこと、若いときは妊婦を抱えて階段を駆け上がったことなど昔話を聞かせていただいたことが思い出されます。

どんな立派な病院や施設をつくっても、そこで働く人の確保ができなければ役に立ちません。問題の解決には長い時間がかかるかもしれない。問題の解決には長い時間がかかるかもしれない。

「事業は人なり」。そんなことを痛感した今回のできごとでした。

町長コラム

Mayor Column Vol.3

筆 おもむくままに

穴水町長 吉村 光輝

